

出世魚人

今年の一月だったか、とある居酒屋での話だ。

「なあ、にいちゃん」

ひとりで食べていたせいもあり、隣の席のフケタ男が、さんざんからんで人生を語ってきた。奥田民夫の唄のように・・・

「その寒ブリの脂ののり具合は最高やろ？」

ぼくは、大きな刺身一切れをひとくちでパクッとやる。そういうおやじは、その癖、酒しか飲んでいないのだが・・・

「うまいっすね。」

「この時期に舞鶴で水揚げされるぶりは最高や。氷見にかつてひけはとらへん」

「同じ日本海ですしね。」

「そうや。日本海の荒波と厳冬がブリを育てるんや。それにちょうどこの時期卵をもっとるしな。」

「へえ～っ」

「にいちゃん。ブリが出世魚なんは、知つとるわな？」

「ええ、でも、いえませんけどね。」

「関西では、ワカナ、ツバス、ハマチ、メジロそして8キロ以上になったらぶりと呼ばれるんや」

「へえ～っ」

「ところでな、にいちゃん。人間かて出世魚がおるん知つとるか？」

「ああ、係長、課長、部長、社長とかですか？」

「ちゃうちやう。そりゃただの出世やがなっ！」

「じゃあ、わからないです。」

「にいちちゃん？にいちちゃんは、出世したいか？」

「まあ、一応は・・・」

「金欲しいか？」

「そりゃ、無いよりかはあったほうがいいですしね。」

「そやわな。じゃあそのためになんかしとるか？」

「ちゃんと働いてますけど・・・」

「ちゃんと働いとる？ほな、そのまま働いたら出世するんか？金持ちになるんか？」

「いや、それはたかが知れてますわ」

「そやろ？にいちちゃんは「たい人間」や」

「たい人間？」

「そや。願望だけの「たい人間」や。出世したり金持ちになりよんは、願望を実現するためにちゃんと実行しよる。そのための明確な計画もたてよる。身の程も知っとるしな。そういう人間を「ます人間」いうんや！」

「ふうん」

「『ふうん』やないで！にいちちゃんも、明日から、いや今から『ます人間』にならなあかへんで。なあ大将？」

「へえ。勉強になります。」

所詮、酔っ払いの戯言と思っていたが、先日「No.1セールスマンになるためのセミナー」に出席したら、講師がおっさんと同じことを言っていた。

何万円もするセミナーに参加して心に残った言葉は、あのときの酔っ払いのおっさんの戯言と同じだったなんて・・・

教訓、教訓。そこらへんにだって、玉石は転がっているもんだ。

充分休んだ。道草もした。こうなったら残りの福は、みな俺がもらうぞ！

ウオーッ。ここらへんで花を咲かせるぞーっ！（なんだか民夫ワールドになってきた。）

荒れる海原に船を出し、「たい人間」から「ます人間」そしていつかは「ぶり」のように脂の乗り切った人間になってやる！

居酒屋の大将の独り言

「いまさらあの「ブリ」が、本当は養殖ものの「ハマチ」だなんていえないよお」。

（この物語はフィクションです）